

天智天皇 山科陵外構柵修繕工事に伴う立会調査

天智天皇山科陵は京都府京都市山科区御陵上御廟野町に所在する。当陵は広大な面積をほこっており、その兆域は陵域のなかでも北側に位置している。本誌39号に掲載された報告によると、その墳丘は方形の基壇のうえに截頭八角錐がのった形状になっているという⁽¹⁾。なお、この墳丘は御廟野古墳などと呼称され、一般的には古墳として認識されているものの、京都市によって周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されているわけではない⁽²⁾。ただし、当陵の陵域内では、兆域の北東側に天智天皇陵付近須恵器窯跡と呼称される周知の埋蔵文化財包蔵地が確認され⁽³⁾、そこから南東側の陵域外には牛尾須恵器窯跡も所在するなど、琵琶湖疏水から南側の斜面に律令期の須恵器窯が築かれたことが知られている(第46図)。

当陵では、東側の境界の一部となる境界標識51～52号付近の外構柵が倒木や根起きなどによって破損したことから、その改修工事をおこなうこととなった。当該箇所は周知の埋蔵文化財包蔵地外であり、所轄する京都市の文化財保護課にも事前に確認したところ、埋蔵文化財に関する届出や対応は不要とのことであったが、上述したように周辺には須恵器窯も分布することから、念のため当部職員が掘削時に立ち会うこととした。調査期間は令和2年9月28～30日の3日間であった。

調査所見 調査した箇所は境界標識51～52号間に存在した倒木の根起き部分である(第47図)。この根起き部分を除去しないと外構柵を設置することができないため、重機によって周囲を掘削しつつ根起き部分の除去をおこなった。掘削の規模は幅約1m、長さ約2m、深さ約0.5mで、確認された土層は、上から表土(I層)、攪乱土(II層)、地山(III層)のみであった(第48図、図版45-1)。攪乱土であるII層にはプラスチックなどの現代のゴミ類が地山であるIII層の直上まで含まれるとともに、III層と同様の性質のものがブロック状に含まれていた。地山であるIII層は、岩盤が風化してもろくなったような土層であった。このII層とIII層の境界付近(II層の最下部)から須恵器片4点(うち2点は接合)が出土した(第49図1～3)。また、調査中に掘削箇所の至近で須恵器片1点を表採するとともに(第49図4)、鏡池と呼称されることもある調整池の周囲でも須恵器片を表採した(第49図5～8)。

なお、今回の報告で使用した座標は、境界標識52号を[X:0、Y:0]、50号を[X:0、Y:18.42]とする任意の座標系である。標高は、境界標識52号を69.51mとする昭和55年に修正作成された陵墓地形図のデータを使用した。また、図面で使用している方位記号の方角は磁北である。

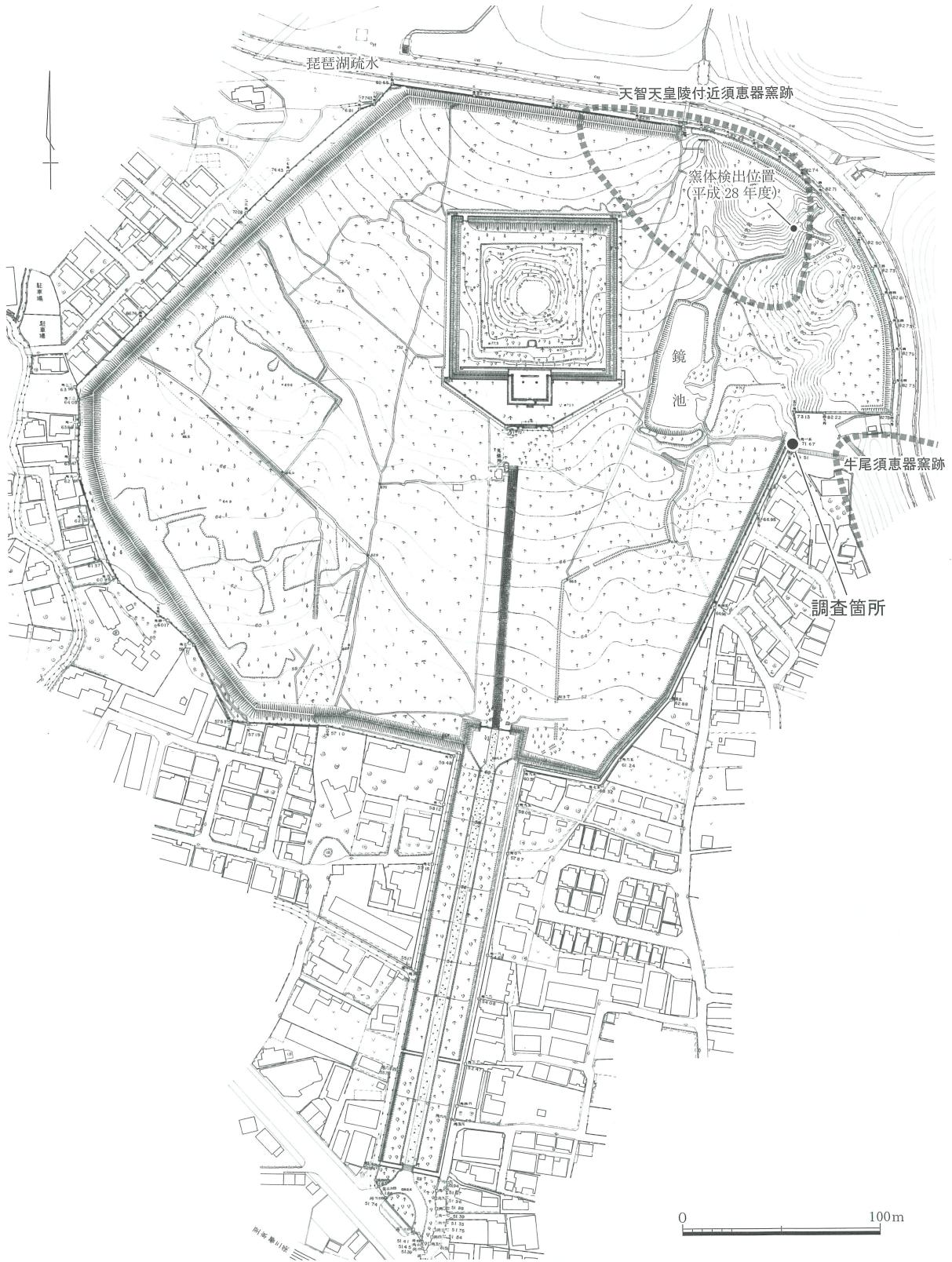
出土遺物 今回の調査で出土した遺物は須恵器片4点(うち2点は接合)で(第49図1～3)、表採した須恵器片は8点(うち2点は接合)であった。その詳細は第49図に示したとおりである。

1～3(図版45-2)は調査区内から出土したものである。1は杯G蓋であろうか。接地口径は復元で9.2cm、かえりが3mmほど突出しており、飛鳥Ⅱの範疇におさまるものであろう。2は杯の底部であろうか。焼き歪んでおり、外面のみ濃い色調となっている。破面の一部も被熱していることから、焼き台として転用されたものである可能性がある。ただし、焼成時のひび割れに火がまわるとともに焼き歪んだと考えても説明はつく。3は甕の胴部片である。外面調整は、横方向の平行タタキののちに縦方向の平行タタキをおこなって格子目状にしたうえで、横方向のカキメがほどこされている。内面には同心円状のタタキがほどこされており、一部に自然釉が付着している。

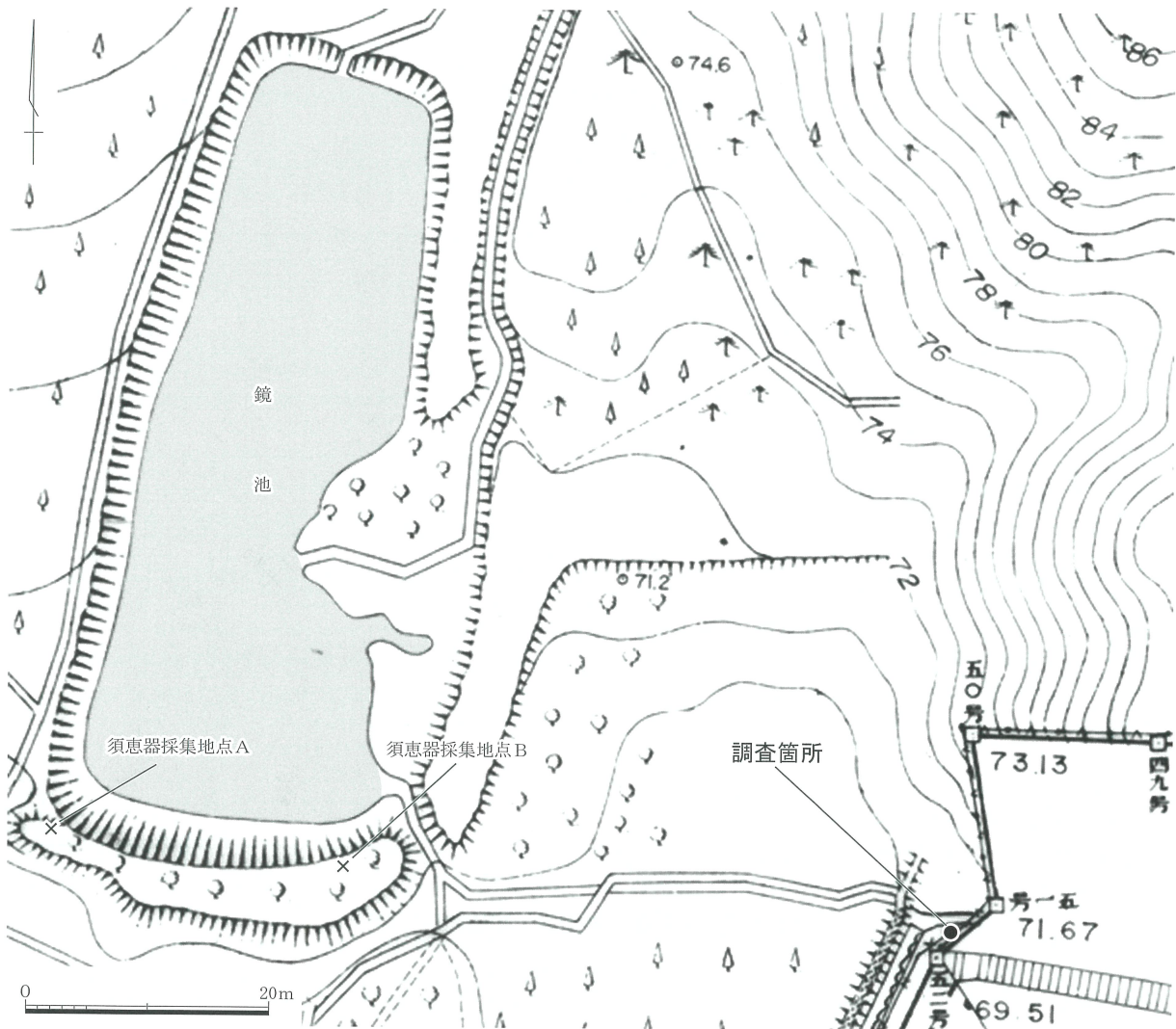
4(図版45-3)は調査区の至近で表採したものである。甕の胴部片で、外面には斜め方向の平行タタキ、内面には同心円状のタタキがほどこされている。

5(図版45-4)は第47図の須恵器採集地点Aで表採したものである。甕の胴部片であろうか。外面には平行タタキののちに横方向のカキメがほどこされており、内面には同心円状のタタキののちに横方向のナデがほどこされている。

6～8(図版45-4)は第47図の須恵器採集地点Bで表採したものである。6は甕あるいは壺の胴部片であろうか。外面には平行タタキののちに横ナデがほどこされている。内面には同心円状のタタキののちに横



第46図 山科陵 調査箇所概略位置図 (1/3,000)

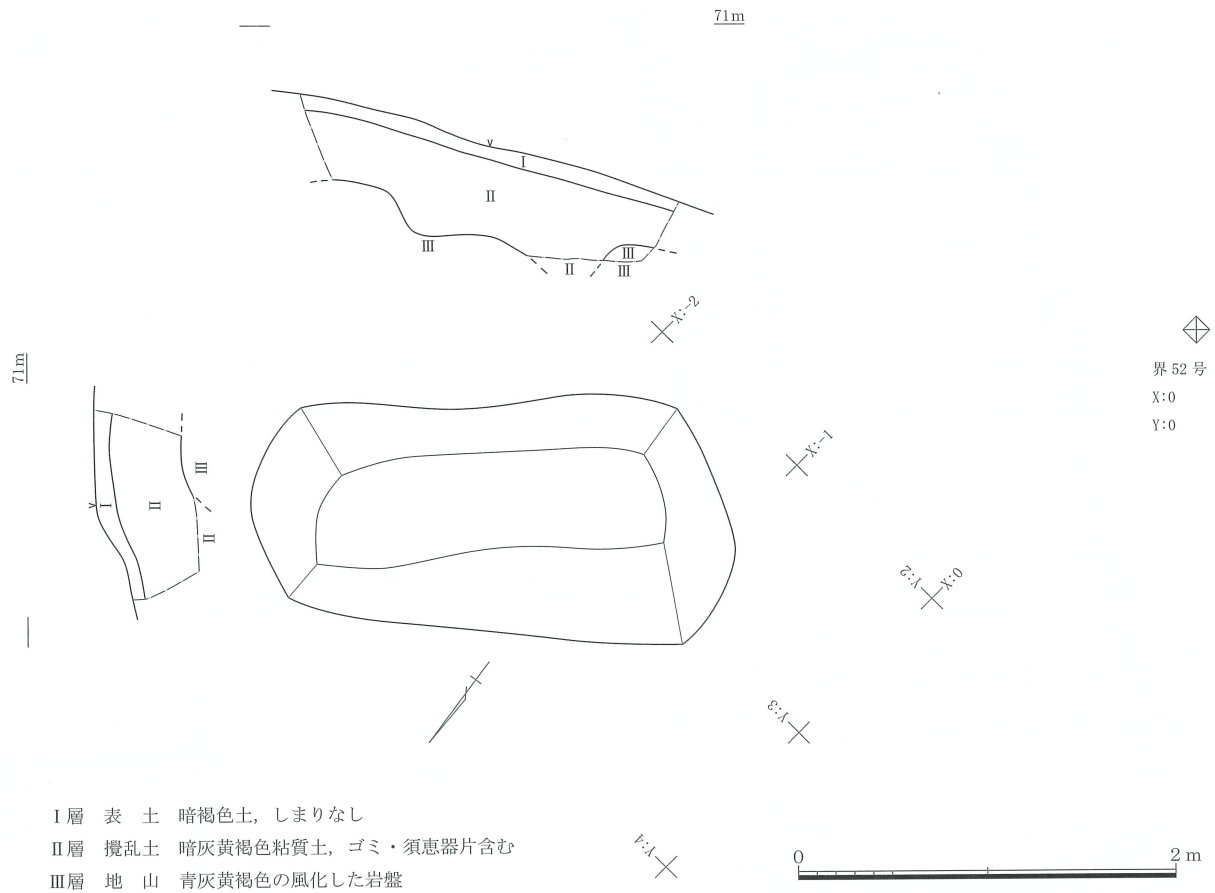


第47図 山科陵 調査箇所詳細位置図 (1/600)

ナデがほどこされている。7は高杯片であろうか。外面には回転ケズリがほどこされ、脚がはがれたような痕跡もみられる。内面は横ナデである。8は甕の胴部片である。外面には平行タタキののちに横方向のカキメがほどこされており、自然釉が多く付着している。内面には同心円状のタタキののちに横方向のナデがみられる。

まとめ 調査の結果、確認された土層は表土、攪乱土、地山のみで遺構は確認されず、工事は問題なく施工できるものと判断した。ただし、地山直上の攪乱土内から須恵器片が3点出土しており、今後周辺で工事などがおこなわれる際には注意を要する。調査箇所を確認された地山は岩盤であり、そのような土層に須恵器窯が築窯されるものなのか調査時には疑念をもったのもたしかであるが、当陵の西側に所在する日ノ岡堤谷須恵器窯跡も岩盤に築窯されたようであり⁽⁴⁾、調査箇所から焼き台として使用された可能性のある破片も出土していることから判断すると、調査箇所の近傍に須恵器窯が存在している可能性が高いものと推測される。

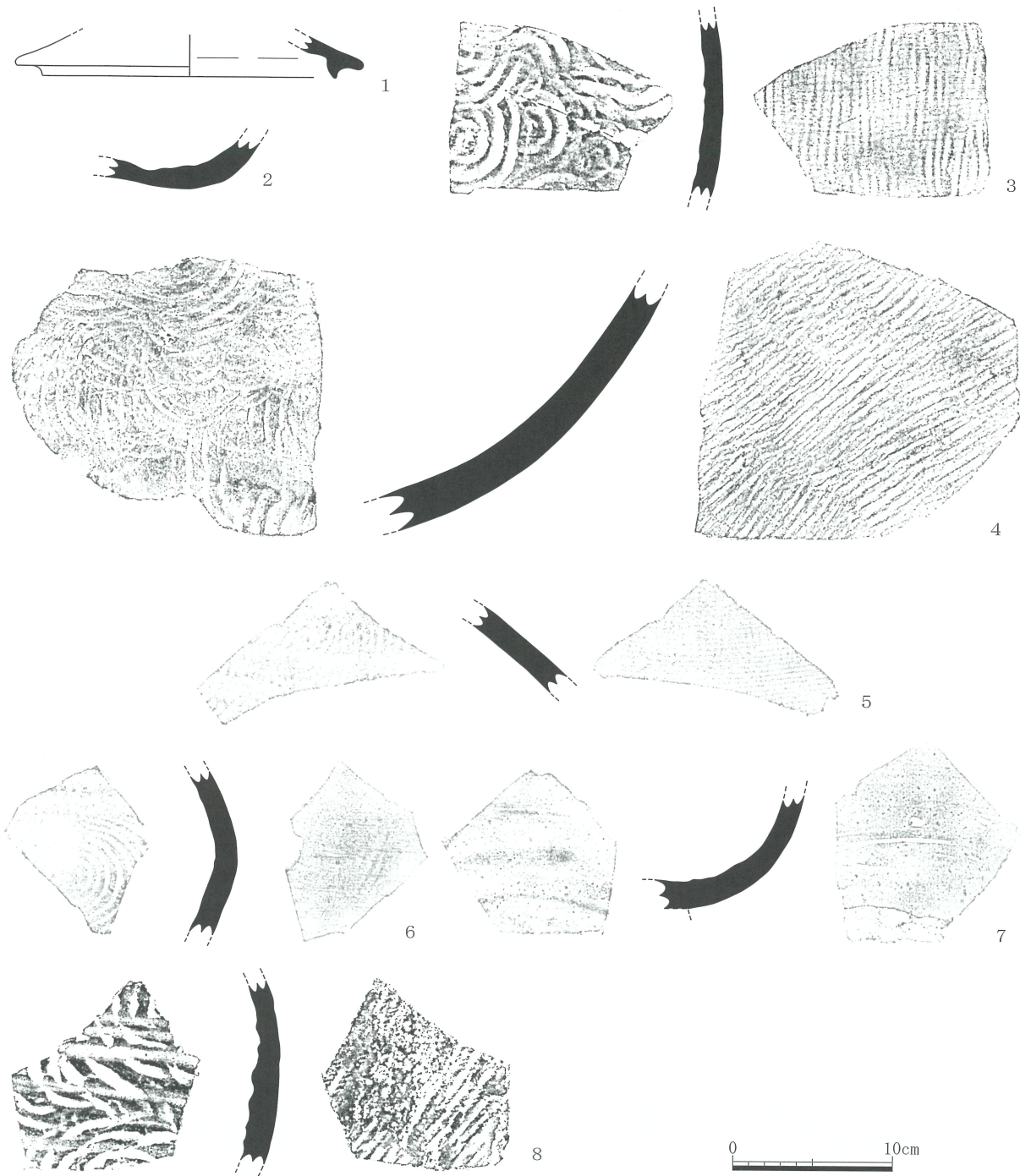
当陵周辺における須恵器窯の操業は、当陵の築造に伴う兆域の設定とともに停止されたことが推測されており、古くから須恵器の実年代比定の定点として意識されてきたという経緯がある⁽⁵⁾。今回の調査で確認された須恵器をみるかざり飛鳥Ⅱの範疇におさまるものであり、編年が精緻になった現在においても当陵の築造後といえるような資料は含まれておらず、上述した推測は成立しうるといえよう。(加藤一郎)



第 48 図 山科陵 平面図・断面図 (1/40)

註

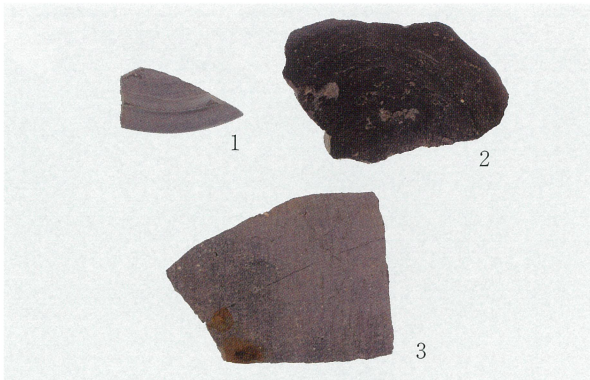
- (1) 笠野 毅「天智天皇山科陵の墳丘遺構」『書陵部紀要』第 39 号、1988 年。
- (2) 京都市のホームページ内に掲載されている遺跡地図による(令和 4 年 1 月 7 日現在)。
- (3) 天智天皇陵付近須恵器窯跡については、古くからその存在が推測されていたが、近年の当部による調査でその窯体が確認されている。
横田真吾「天智天皇 山科陵水路その他整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第 69 号〔陵墓篇〕、2018 年。
- (4) 丸川義広・内田好昭・平方幸雄「日ノ岡堤谷須恵器窯跡」『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所、1997 年。
- (5) 森 浩一「あとがきにかえて」『論集 終末期古墳』塙書房、1973 年。



第49図 山科陵 出土品実測図 (1/4)



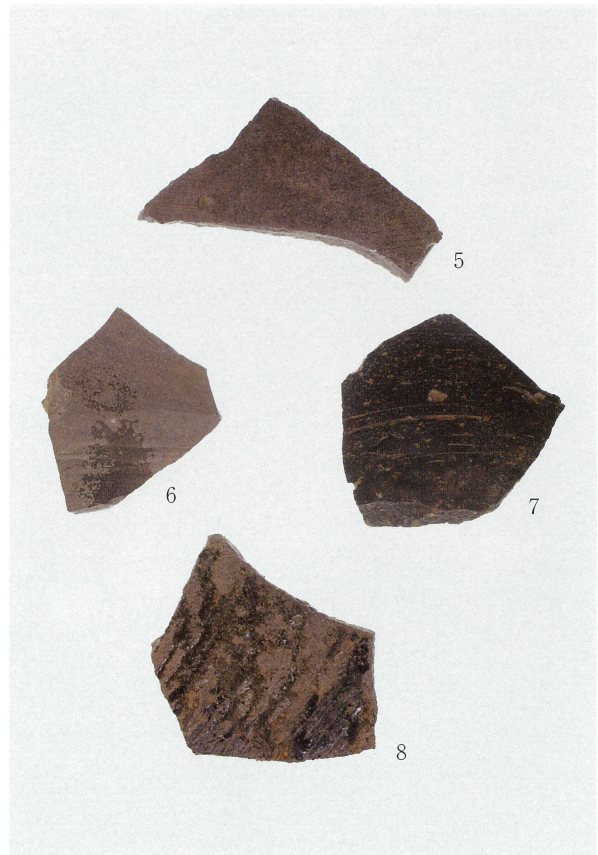
1 調査箇所全景(北西から)



2 調査箇所出土品



3 調査箇所至近採集品



4 鏡池周辺採集品